

看護学教育の変化の一考察 ー「タイラーの原理」からケアリングへ

立 石 和 子*

要 旨

日本の看護学教育は、社会からの要請とはいえ、大学による教育が急激に増加している。しかし、少子化により、2009年には大学の需要供給が一致する見込みである。この看護学教育は、特にアメリカを中心としたラルフ・タイラー (Tyler, R. W.) の提唱した「タイラーの原理」に影響され、行動目標中心のカリキュラムとなり、看護学教育においては、大学教育の特徴をなくす結果となっている。20世紀末、ネル・ノディングス (Noddings, N.)、ドナルド・ショーン (Donald A.S) らの出現により、教育の視点が、教育的ケアリングや反省的実践へと変わろうとしている。また、看護学教育が高等教育機関、すなわち大学教育として特徴を明確にするのには、教育方法としての、CureからCareへの明確化が必要であることがわかった。

キーワード：看護学教育、タイラーの原理、カリキュラム、高等教育、ケアリング

はじめに

日本の看護養成課程と一言でいっても、看護師になる道は多様である。その中の一つである看護系大学（単科大学だけでなく総合大学の看護系学部を含む）は、1991年の11校から2003年には107校となっている。看護師養成のための教育課程は、いまや大学から高校専攻科まで、多くの段階、多くの機関類型があり、特に高度化を目指して看護系大学が増加している。その背景で高等教育は、ユニバーサル化してきており、2009年には、大学の需要と供給が一致すると言われている。そのような状況で、看護学教育の特色を示していく必要が大切である。

では、日本の看護学教育がどのようなになっているかというと、アメリカの影響を大きく受けている。そのアメリカの看護学教育の根

底には、「タイラーの理論」があり、この理論を中心に成立している。しかし、現在ではアメリカの看護学教育だけでなく、教育学全体においても「タイラーの理論」に対しては批判がある。^{1) 2)}

そこで、今社会が求めている看護学教育におけるカリキュラムは、どのようなものか。はじめに、看護学教育に大きく影響を受けた「タイラーの理論」を中心に述べる。最後に、今後の看護学教育に必要なものは何なのか考察する。

1. 看護学教育の基となった「タイラーの原理」とは

行動科学者ラルフ・タイラー (Tyler, R. W., 1902-95) は、『カリキュラムと教授の基礎原理』(Basic Principles of Curriculum and Instruction)

*九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科

(1949年)を書いている³⁾。タイラーは、ボビットやチャーターズの「社会的効率主義」の系譜を継承し、産業主義の工学モデルを基礎として進歩主義教育のカリキュラムと授業の「計画」と「評価」を理論化し定式化している。その定式化された理論は、一般に「タイラーの原理」と呼ばれ、カリキュラムと授業の計画と実践と評価の原型的なモデルとして影響を及ぼしている。この著は、「教育学の機能的手段として教授プログラムをみる1つの方法を略述する」目的で著された研究の手引き書である。

この著では、カリキュラム開発者の4つの問うべきものとして、カリキュラムと教授を段階的・階層的な四つの構成要素に分割し、行動科学の方法を応用している⁴⁾。

1. 学校が達成しようとしている教育目標は何か。(目的から目標へ)
2. その目標を達成するためにはどのような教育経験が提供されなければならないか。(教育的経験の選択)
3. どうしたらこれらの教育経験を効果的に組織することができるか。(教育的経験の組織)
4. これらの目標が達成しているか、どう判断したらよいか。(結果の測定)

これらの段階で示される段階的・循環的な過程であり、それぞれの段階において、行動目標および行動言語による特殊化・明確化が求められた。

タイラーの原理は、「目的」の規定要因を「学習者」「現代の生活」「教科専門家の指示」の三つに求め、カリキュラムを「経験」で構成し、「学習」を「環境との相互作用」と規定、そして、カリキュラム開発を教師とカリキュラム研究者との共同作業としている、これら三つの点において、進歩主義教育の伝統を反映している⁵⁾。

教育についていうと、デューイ (Dewey, J) は、「経験に意味を付与し、ひき続く経験の進路を指導するように経験を再構成もしくは再組織すること」と定義している。タイラーの場合は、「教育は人々の行動類型の変化の過程である」規定されている。タイラーは、教育目標の規定にあたって、目標の内容的側面と行動的側面の二次元チャートを示し、目標を行動言語で表記しうる領域で求めている。

タイラーの原理に基づく研究は、行動目標の研究および評価研究としてブルーム (Bloom) らの教育目標の分類学の流れと、段階的過程とカリキュラム計画の研究の発展である、タイラーと共に研究したタバ (Taba) の「カリキュラム開発—理論と実践—」との二つに分かれている⁶⁾。

2. タイラーと共に影響を与えたブルームの形成的評価⁷⁾

このブルーム (Bloom, B) の形成的評価は「教育目標の分類学」において、教育内容として「認知的領域」、「感覚・情動的領域」と「運動・生理的領域」の3領域に大別し、それぞれの領域に対応する教科内容を学年別に細かく分類し、系統的・段階的な教育目標のマトリックスで提示する研究を展開している。「教育目標の分類学」を基礎として構成されるカリキュラムを、一人ひとりの学習の進度に応じて評価し修正するのが「形成的評価」である。ブルームは、教育評価を学習の前に行う「診断的評価」と学習の過程で行う「形成的評価」と学習の後で行う「総括的評価」に分けて、この3つのうち「形成的評価」を教育評価の中心に設定すべきだと主張している。「形成的評価」によって学習の個別化が促進されカリキュラムが修正されて、もっとも有効で効果的な学習が組織され、「完全

習得学習」が、すべての子どもの個性に応じて達成されるというのである。

ブルームの「教育目標の分類学」、「形成的評価」と「完全習得学習」の理論は、いずれも、行動科学の心理学的研究によって学習の個別化を推進し、教育の機会均等を授業過程において現実化する信念を基礎としている。①原子論的な要素主義である。細分化し系列化して分類した「教育目標」は、一つひとつが単体の等価で均一な原子のような単位として認識されている。学習では、そのすべてを系列に即して習得することが求められている。②学習の個人差が時間の差へと還元されていることである。③カリキュラムと授業に関する理論が、学習の過程を効果的に統制する技術として扱われていることである。

このように、「タイラーの原理」を基礎とするカリキュラム開発、ブルームによる学習過程の行動科学的分析と技術的統制の原理として、1960年代から70年代にかけての、カリキュラム理論と授業理論の支配的パラダイムであった。

3. アメリカにおけるタイラーの役割

1) 1950年以前の看護学教育

1950年以前の看護学教育カリキュラムは、技術的スキル、環境の管理、哲学と倫理基準に関連し、主要な要点は、病気とそのコント

ロールにあった。カリキュラムは、病気中心看護、身体系看護、診断科別看護という3つに関連して構造化されている⁹⁾。

例えば、1920年代の病院付属看護学校の教育目的としては、急病の看護、医師の命令の遂行、医師の不在時の看護、医師の判断の根拠となる正確な情報の提供、病気感染の予防、健康の教師として十分に訓練されていることである。これらの仕事を遂行できるための看護学校の訓練の目標は、技術的スキル、観察力、注意深さ、判断力、パーソナリティなどの力を開発することである⁹⁾。

ティーチャーズ・カレッジの看護・健康学科は、看護学校の教員と管理者を養成するために設立され、①看護学校の教授法と管理法、②看護学校と病院の一般的管理、③公衆衛生、④看護師準備過程で成り立っていた。必修科目は、40単位で教育学中心であった¹⁰⁾。(表1)

ロングウェイ (I. M. Longway) によれば、病気中心看護では、次のような弊害を生じている。看護師も医師も病域に気をとられて、患者を1人の人間としてみることを忘れる。さらに、病気に関する知識の増大は、看護学教育で教える内容の増大につながり、すべてを教えることが非現実的である。これらの事由により、身体系看護、診断科別看護が生まれる。診療科別看護とは、学生が、医師の都合により分けられた内科、外科、小児科、とい

表1 エール大学 教授法と管理法の課程のカリキュラム (1928年)

				単位
教育学	6 コース	4 コース	一般	18
		2 コース	看護学校のためのもの	
教 科	5 コース	化学		16
		生物学（生理学）		
		微生物学（細菌学）		
		衛生学		
		看護の歴史		
一 般	1 コース	病院と看護学校の管理		2
	2 コース	社会科学		4

必修40単位 (卒業までの必要な単位は60~70単位) 中野和光, p.79 (1990)

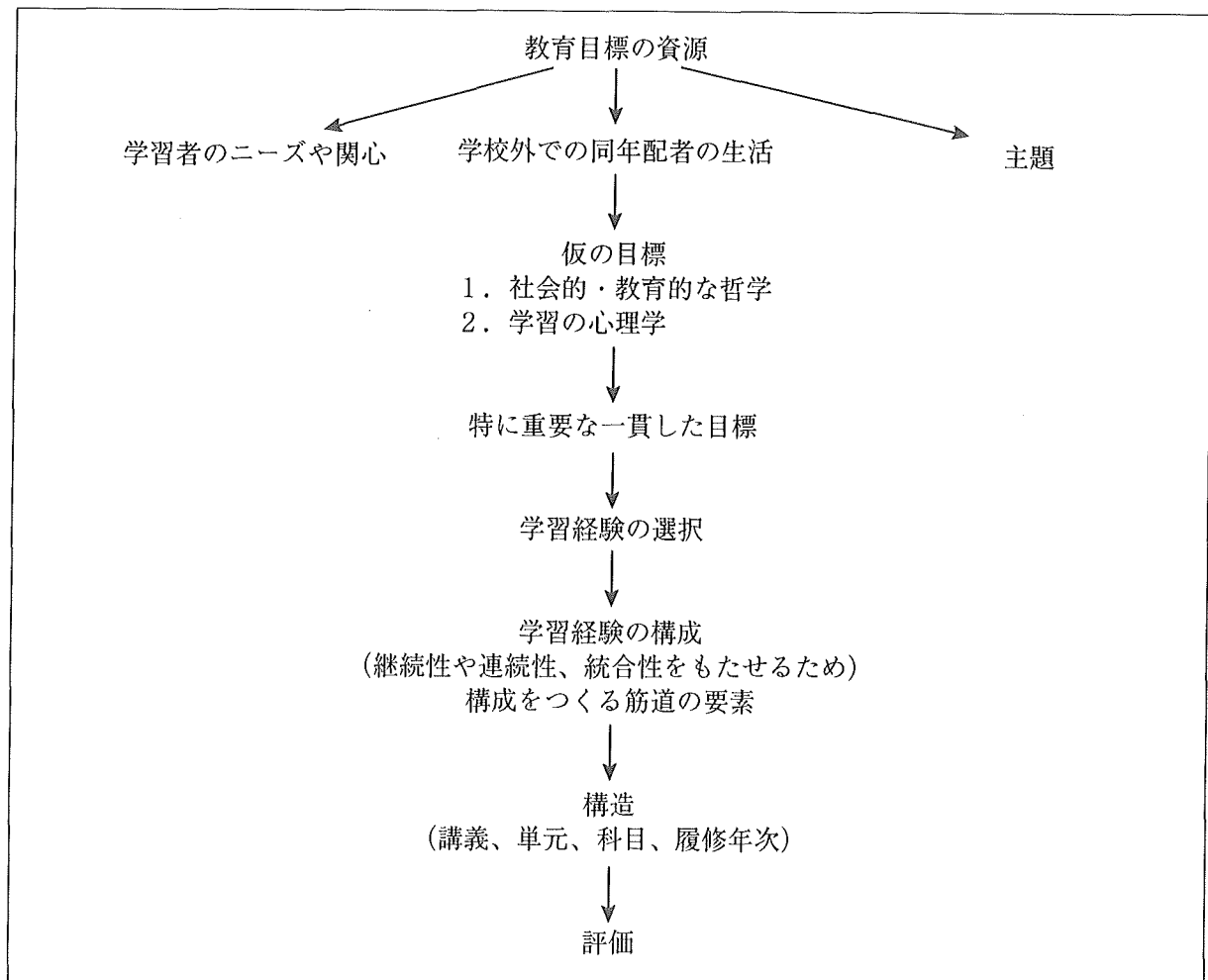
うように分けられてそれぞれの科を回り実習する方法である。診断科別看護の欠点は、看護内容がしばしば重複すること、部門ごとの意志疎通の欠如に導きやすいことである¹¹⁾。最後に身体系看護とは、骨格系、筋肉系、神経系など分かれ、それぞれの看護を指導することである。長所は、病気に関する知識の増大と同時に、社会の変化する要求にも対応できることである。しかし、これについても、人間を生物学的機関としてあつかうことや、複数形にまたがった病気もたくさんあることから、人間を全体として捉えた看護が必要とされるようになった。¹²⁾

2) タイラー型カリキュラムからの脱却

1939年全米看護教育連盟 (NLNE) は、タ

イラーのカリキュラムパラダイムを取り入れ、1950年代後半に制度化している。規則、基準そして視察者の志向などを通して、これらの強力な機関は哲学、概念または構成要素、そしてあらゆるレベルの行動目標を看護における博士課程以外の全ての課程にもちいることを必須とした。¹³⁾

タイラーのカリキュラムパラダイムによると、目標は学生、社会、学習主題の三つがもととなって立てられる。この仮の目標は、学部の教育方針と学習心理のふるいかけられる。次に、目標達成を促すような学習エピソード選択し、指導のために学習、課目、単元のプログラムを構成する。そして最後に評価の手順を考察しなければならない。これは、行動主義モデルである。¹⁴⁾ (図1)



ベヴィス・ワトソン, ケアリングカリキュラム, 医学書院p18 (1999) (著者一部変更)

図1 タイラーのカリキュラム開発のパラダイム

NLNEは、規則、基準そして視察者の志向を通じて、哲学、概念または構成要素、そしてあらゆるレベルの行動目標を、看護における博士課程以外の全ての課程（看護学校、短期大学、学士、修士）に用いることを必須としている。このことにより、卒業生に一定の類似性が見られるようになったため、看護学校、看護短大、看護学士の卒業生を見分けることが困難な状況となっている。¹⁵⁾

タイラー型カリキュラム開発の成果が看護カリキュラムの定説として支持されるのに影響を与えたものに二つある。一つは、ベヴィスのカリキュラム開発に関する書物（1972）である。これは、初等・中等教育カリキュラム開発の行動主義理論を看護という実践分野のために役立つハンドブックに書き換え、カリキュラム学専攻の学生やカリキュラム開発を研究している標準テキストになっている。次に、メイジャー（Mager）著『教育目標と最終行動Preparing Instructional Objectives（1962）』出版後すぐに、アメリカ中のワークショップが行われ、多くの看護学教育者が「測定可能な行動目標」を正しく書き表し、使う方法を学ぶ機会を得ている。行動目標に対する崇拜は頂点に達し、その開発までもが定型化し、確立されている。タイラー型カリキュラム開発の成果は、不可欠な構成要素になっている。これらが構成要素である証拠がなければ、州看護委員会の承認がありえないだけでなく、卒業生は免許試験を受けられない時期である。¹⁶⁾

そこで、タイラーのモデルの大きな問題として、1つは、すべての学習プランに対して行動目標を考案しなければならない。もう1つは、行動目標の概念化が厳しく、狭すぎることである。これらから、1988年フィラデルフィアの全米看護教育学会、『看護の大学および高等教育課程認定基準Criteria for the

Appraisal of Baccalaureate and Higher Degree Programs in Nursing』（1988）の第6版発行およびNLNEの大学および高等教育課程認定基準協議会は、タイラーのモデル（看護教育の訓練という発達段階で有効なもの）から、専門職レベルのカリキュラム開発に有効なものへの変換のために10年間を要している。その一つが、ベヴィス（E. O. Beivis）とワトソン（J. Watson）のケアリングカリキュラムである。¹⁷⁾

タイラーの原理に対しては、諸理論家から批判がある。「視角と論点において鋭いものがあるというべきだが、いずれも代替すべき具体的方策と原理の点で不十分であり、これに代わるべき包括的でまとまった論理的枠組が十分に備わっていない。」「現代社会の生活と生徒を調査研究した結果をふまえ、教材の専門家の意見を情報源とし、これらを学習心理、教育哲学のふりいにかけて目標を精選しようとした点に関するものである。」などである。¹⁸⁾

ベヴィスは、看護学教育に対し「行動目標は、本質的に、教職員が重要と考えるもの（また具体的な、つまり測定可能な目標のみ）を明快に説明しており、学生の価値や趣味、そして生まれつきの性癖などは無視している。行動目標は、その性質ゆえに、経験的に証明できないような目標の達成を促進できない。行動目標は経験主義や訓練とは適合するが、形成的教育や人間科学としての看護学とは調和しないのである」とまとめている。そして、今後方向性として以下のように述べている。¹⁹⁾

「看護教育に求められていることは、カリキュラムの実際的な要素や実践面の正当化であり、教育すべてが活動的で創造的であることへの支持である。多くの教育者が「密かに」していること、すなわち計画的な、あるいは規定された、偶然の、または個人的な、批判、

独立、創造、そしてケアリングを教えることである。(中略)したがって重要なのは、看護教育者とカリキュラム開発社が、カリキュラム開発の新しいモデルを追求し、学生が看護ケアに取り組むための創造的で活動的な方法の習得に努めるように促すカリキュラム開発の手段を提供することである。」

アメリカにおける看護学教育のカリキュラムは、カリキュラムの標準化ともにタイラーの原理が広くもちいられ、「学問としての構造」に基づくカリキュラムとして編成が行われていることがわかった。そして、タイラーの原理に対する批判は、行動主義モデルから脱け出し、新しいモデルへの転換の時期にきていることがわかる。

3. タイラーと対立的立場をとったラッグ

今回、看護学教育のカリキュラムについて、タイラーに注目し振返ってみた。タイラーを中心にほかにかわりのある教育者をふくめまとめている(図2)。

タイラーはデューイの学習経験の考え方の点で影響を受けている。例えば、デューイはタイラーに「教育活動とカリキュラムの編成の作業は、そこで提供される学習場面ができるだけ生徒の経験に一定の方向性を与えるように計画することが必要である」という示唆を与え援助したのである。²⁰⁾

では、タイラーのモデルの特色のひとつは、「目標指向型」モデルである。すなわち、教育目標を漠然とした方向を示唆する目標や課題を明示する目標としてではなく、さらに具体的に学習者の到達すべき行動目標との形にして分析したのである。このことは、ブルームに引き継がれている。タイラーの主張のな

かの、評価活動をカリキュラムの一環として位置付け、リサイクルする意思決定のための情報収集活動としての評価はカリキュラム開発のための基本的な活動である点について、ブルームやタバに引き継がれている。²¹⁾

そして、タイラーと対称的だったのがラッグ(Rugg)である。ラッグは、進歩主義の伝統に立って、カリキュラム概念を「学校の生活とプログラム」「子どもと教師の生活を構成するダイナミックな諸活動の流れ」と広義に定義している。教材概念は、言語的領域のみでなく「教育的価値のある経験」の全てを含みこむものとして規定している。教育の目標は、「生活の諸技術」(the arts of living)という一般的な生活で示され、学校における学習と表現の諸経験を社会生活との連続性において再構成することにより、学校を「生きるための社会的かつ個人的な企ての場」として再生することが求められている。

「カリキュラム・デザイン」は、創造的芸術活動をモデルとしている。ラッグは、芸術とアナロジーで「デザイン」の諸原理を、(1)カリキュラムが目的(価値)をもつこと、(2)デザインにあたって、可能な限り具体的なデータを収集し組織すること、(3)構造の形式と内容の構成においては、デザイナー(教師)の内的な創造力・想像力が発揮されること の三点に求めている。デザインの中心問題は、主体である教師の教養と想像力である。ラッグは「カリキュラム・デザイナーはアメリカ人の生活様式を熟知し、物質文明だけでなく、その制度・心理に通じ、価値や諸概念に対して感受性が豊かであり、ヨーロッパ文明にも通じたひとでなければならない」と述べている。²²⁾

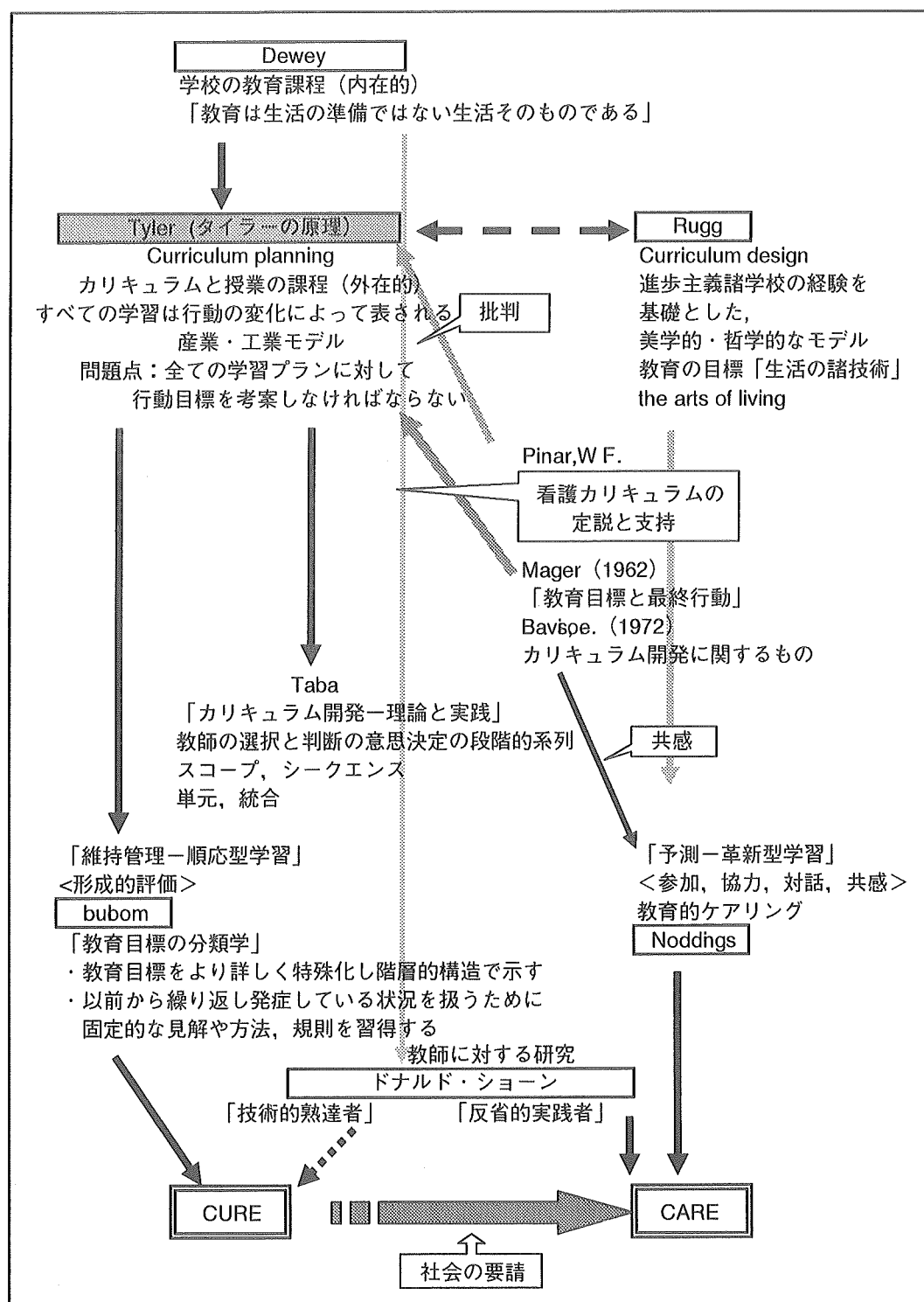


図2 看護学教育に影響を与えた人々

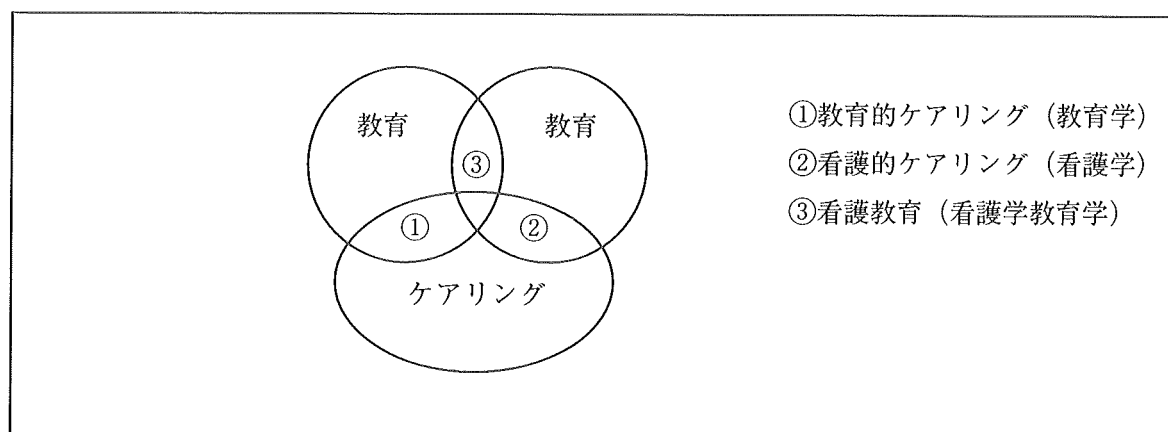
4. ケアリングカリキュラムへの変換… ノディングス

今、注目したいのが、教育哲学者のノディングス（Noddings, N.）である。
ノディングスはケアリングの教育方法とし

て、「ティーティングの脈絡では、対話、実践、確証」という方法や、「モデリング」を提唱している。カリキュラムに関しても、ケアリングに関する本質的な諸テーマを巡って組織されているユニバーサル・カリキュラム

表2 ケアリングの教育方法分類（ノディングス）

分類	分類
自己のケア	自分の身体を育て健康を守ることをはじめ、人生における誕生と死去の意味を知り、宗教生活と職業生活と余暇の生活の過ごし方を学ぶ領域
親しい者のケア	恋人、夫婦、親子、友人、同僚、近隣の関係において他者を慈しみ世話をする知識と技術を学び、親密な関係を基礎として社会を構成する領域
見知らぬ人や遠い他者のケア	人種、階級、ジェンダーによる生活と意識の違いや多様な国々の文化や社会について学び、異質な人々が相互にケアし共存する生き方を学ぶ領域
動物、植物、地球のケア	身の回りの自然を守り地球を環境破壊から救う方法を学ぶ領域
人工世界（道具と技術）のケア	人間の考案した道具や技術や機械の修繕や保管の方法を学ぶ領域
アイデア（芸術と学問）のケア	数学・科学・歴史・文学・美術・倫理学などの文化を尊び育む領域



齋藤勉 日本看護学教育学会学術集会配布資料（2002.7.31）

図3 教育、ケアリング・看護の関係図

にすべきだとしている。中野啓明は「デューイの『学校と社会』で描かれているケアリング教育姿とノディングスによるユニバーサル・カリキュラムの6領域との間には関連がある」といっている。²³⁾（表2）

齋藤は、教育学と看護学とそしてケアリングの関係を図にしている。（図3）齋藤が注目しているのが、ノディングスである。メイヤーロフ（Miltonsai Mayeroff）は、「ケアリング」という点において、「ケアする人」と「ケアされる人」との「関係性」にあることを認めながらも、「ケアする人」の意識状態に重きを置いている。それに対し、ノディングスは、ケアする人の中で続けられていることを強調するとともに、ケアされる人の役割や、ケアする人とケアされる人の助け合いについても強調している。²⁴⁾

また、ノディングスは、デューイの教育理論に関して「デューイは、真の民主主義をが、同じレベルでのフェース・トゥ・フェースの関係を求める、といつも信じていた。同様に、ケアの倫理は基本的な人間関係によって理論化を始める」ともいう。²⁵⁾

齋藤は、ケアの方法にはまだ、明確なものがないと言っている。そして、日本における教育学的ケアリングは、「指導の過程においてケアリングが欠如していると、その指導は失敗に終わるので、指導×支援（care）＝援助」ととらえる考え方になりつつある。」といっている。²⁶⁾

5. 専門職としての看護師…ドナルド・ショーン

そして注目したいのが、マサチューセッツ

工科大学の哲学者であるドナルド・ショーン (Donald A.S) の専門家研究の著作『反省的実践家－専門家はどのように思考しているか』(1983)である。この概念によれば、科学的な知識や技術が確定しないために「マイナーな専門職」とみなされてきた教師や福祉のケースワーカーや図書館書司などが、専門家として認定されることとなる。²⁷⁾「反省的実践」においては、基礎科学、応用科学、実践的技術という知識のハイエラキーは解消し、すべての知識は「厳密性かレリバンズ (現実的な意味) か」という問いによって吟味されることになる。知識の正統性は「論争」によって争われるのではなく、現実的な問題の解決において「総合」されるようになる。ショーンは、「大学教育もアカデミックな教育よりもむしろ多様な領域の専門家教育によって構成されるべきである」と主張している。²⁸⁾

専門家像としてショーンが対比させているのが、「技術的熟達者」と「反省的実践家」である。「技術的熟達者」とは、現実の問題に対処するために、専門的知識や科学的技術を合理的に適合する実践者としての専門家をみる見方である。「反省的実践家」は、専門

家の専門性は、活動課程における知と省察それ自体にあるとする考え方であり、思考と活動、理論と実践という二項対立を克服した専門家モデルである。反省的実践家の知を捉える鍵は、「行為の中の知 (knowing in action)」 「行為の中の省察 (reflection in action)」 「状況との対話 (conversation with situation)」 という三つの概念である。²⁹⁾

ショーンは、建築、都市計画、臨床心理、経営コンサルト、医療関係などの専門家の事例研究を通して、これまで「科学的技術の合理的適用 (technical rationality)」を原理としてきた専門家の「技術的実践」にかわって、現代の専門家は「活動過程における省察 (reflection in action)」を原理とする「反省的実践」において専門性を発揮していると主張している。「技術的実践」が、どんな状況にも有効な科学的な技術と原理を基礎とするのに対して、「反省的実践」は、経験によって培った暗黙知 (ポラニー) を駆使して問題を省察し、状況と対話しつつ反省的思考 (デュイー) を展開して、複雑な状況に生起する複雑な問題の解決にクライアント (顧客) と連帯して取り組んでいる³⁰⁾。(表3)

表3 「技術的実践」の授業分析と「反省的実践」の授業研究の比較 (ショーン)

	技術的実践の授業分析	反省的実践の授業研究
目 標	プログラムの開発と評価 文脈を越えた普遍的な認識	教育的経験の実践的認識 文脈に繊細な個別的な認識
対 象	多数の授業のサンプル	特定の一つの授業
特 徴	教授学、心理学、行動科学 実証主義の哲学	人文社会科学と実践的認識論 ポスト実証主義の哲学
基 礎	数量的研究・一般化 標本的抽出法・法則的立学	質的研究・特異化 事例研究法・個性記述学
方 法	効果の原因と結果 (因果) の解明	経験の意味と関係 (因縁) の解明
結 果	授業の技術と教材の開発	教師の反省的思考と実践の見識
表 現	命題 (パラダイム) 的認識	物語 (ナラティブ) 的認識

このショーンの「技術的熟達者」を“CURE”としたとき、「反省的実践者」は“CARE”はではないかと考える。この

“CURE”と“CARE”の対比は、今後の看護学教育のカリキュラム作成において考慮できるのではないかと考える。

「タイラーの原理」からノディングスの「ケアリング」へと看護学教育のカリキュラムをみてきた。看護者は、よりよい看護の提供を目指し、自分たちの地位を築くために努力している歴史だと考える。

立川は、「キュアからケア」への発想の転換が必要となってきたといっている。³¹⁾ カリキュラムを考えると、メイヤロフ、ノディングスなどの「ケアリング」に振り返り、体系化することも、一つの手法と考える。

おわりに

看護学教育は、教育学や社会学の理論家に支えられ、社会変化・要請や医療情勢に対応できるように、より全人的な教育へと変化が問われていると考える。さらに、超高齢化社会と医療の高度化は、医療の質の変化だけでなく、それを支える教育の変化を求めている。これは、リスクマネジメント、セカンドオピニオンなど現在の医療問題へもつながる教育であると考え。最後に、今の時代に必要な看護学教育を行うためには、看護師に求められているもの、すなわち看護師の職務を明らかにし、それが反映された、高等教育としてのカリキュラム作成が必要となっている。

注

- 1) 鈴木敦省.ラルフ・タイラーの原理 (The Tyler Rationale) 批判, 学習院大学文学部研究年報, p.199-p.237 (1991)
- 2) ベヴィス・ワトソン, 安酸史子監訳, ケアリングカリキュラムー看護教育の新しいパラダイム,医学書院, p.22-p.23 (1999)
- 3) バーナード・バレルソン他, 佐々木徹郎訳, 行動科学入門, 誠信書房, p.13-p.21 (1962)
- 4) R. W. Tyler, Basic Principles of Curriculum and Instruction Syllabus for Education 360,

- p. 1-p.2 (1950)
- 5) 安彦忠彦, カリキュラム研究入門, 勁草書房, p.96 (1985)
- 6) 安彦忠彦, 前掲書, p.97
- 7) 佐藤学, 教育方法学,岩波書店, p.28-p.29 (1996)
- 8) I. M. Longway, Curriculum Concepts-An Historical Analysis, Nursing Outlook, 20 (2), p.117 (1972)
- 9) 中野和光, 看護教育の教育課程の歴史的発展に関する一考察 (1)ー合衆国の場合を中心としてー, 福岡教育大学紀要, 39 (4), p.77-p.78 (1990)
- 10) 中野和光, 前掲書, p.79
- 11) Logway, 前掲書, p.118
- 12) Logway, 前掲書, p.118-p.119
- 13) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.20-p.21
- 14) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.16-p.19
- 15) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.20-p.21
- 16) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.20-p.21
- 17) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.20-p.22
- 18) 鈴木敦省, 前掲書, p.228-p.230
- 19) ベヴィス・ワトソン, 前掲書, p.25-p.27
- 20) 鈴木敦省, 前掲書, p.216-p.219
- 21) 安彦忠彦, 前掲書, p.94-p.96
- 22) 日本カリキュラム学会編集,現代カリキュラム辞典, ぎょうせい, p.227-228 (2001)
- 23) 中野啓明, 教育的ケアリングの研究, 樹村房, p.92-p.95 (2002)
- 24) 中野啓明, 前掲書, p.70-p.71
- 25) 中野啓明, 前掲書, p.128
- 26) 齋藤勉, 教育講演 I 「教育的ケアリングとは何か」(資料), 日本看護学教育学会第12回学術集会 (2002,7,31)
- 27) ドナルド・シヨーン著,佐藤学,秋田喜代美訳,専門家の知恵 反省的実践家は行為しながら考える, ゆみる出版 p.22-p.23 (2001)

- 28) ドナルド・シヨン著,前掲書, p.30－
p.38
- 29) ドナルド・シヨン著,前掲書, p.211－
p.227
- 30) 佐藤学, 前掲書, p.73－ p.79
- 31) ネル・ノディングス著,立川善康他訳, ケ
アリング 倫理と道德の教育－女性の観点
から, 晃洋書房, p.321－ p.322 (1997)

参考文献

- 1) Marjory.G, Michael.A, A systematic
approach to curriculum revision, Nursing
Outlook,22(5), p306－p310 (1974)
- 2) Barbara.J, Analysis of structural forms used
in nursing curricula, Nursing Research, 20(5),
p.388－ p.397 (1971)
- 3) E. O. Beivis, J. Watson, Toward a Caring
curriculum (1989)
- 4) エスターL. ブラウン著, 小林富美栄訳, ブ
ラウンレポート＝これからの看護 (1966)
- 5) 安彦忠彦編, 新版 カリキュラム研究入門
(1999)
- 6) 田島佳子,看護実践能力育成に向けた教
育の基礎,医学書院 (2002)
- 7) 佐藤学, 教育方法学, 岩波書店 (1996)
- 8) ネル・ノディングス著, 立川善康他訳, ケ
アリング 倫理と道德の教育－女性の観点
から, 晃洋書房 (1997)
- 9) ミルトン・メイヤロフ著, 田村真・向野
宣之訳, ケアの本質－生きることの意味, ゆ
みる出版 (1993)

The Contribution of change of Nursing Education

—From Caring to Tyler Theory—

Kazuko TATEISHI

Abstract

The number of universities offering nursing education in Japan has increased dramatically as the demands of society for professional nurses has increased. However, the demand for university places is predicted to match the supply by 2009 due to the aging of society and falling birth rate. Nursing education in Japan has been influenced by the trends of studies by scholars in education and particularly by the “Tyler Theory,” which has been mainly used in the U.S. Nursing education has therefore been based on a curriculum that focuses on behavioral objectives, and the individual characteristics of schools have disappeared. By the end of the Twentieth Century, the emergence of researchers such as Noddings and Donald shifted education studies the “Caring” and the “The Reflective Practitioner. In addition, we conclude that a change of emphasis from cure to care as the method of education is necessary for nursing education to reflect the characteristics of higher education and university education.

Key words: nursing education, Tyler Theory, curriculum, higher education, caring